

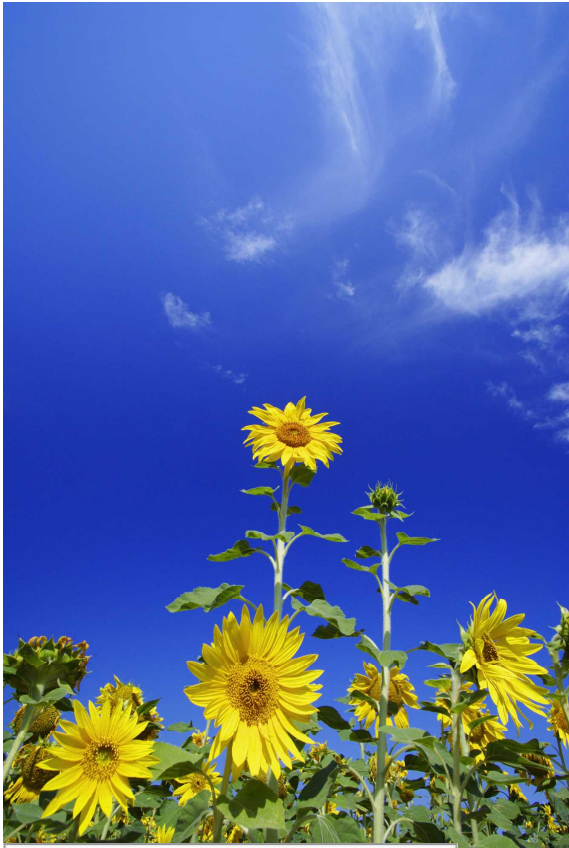


晴天の心

立教186年8月号
 大阪府富田林市寿町 4-9-10
 URL:www.tomiishi.net
 TEL:0721-23-3466 090-5243-4669



月次祭 8月19日(土) 午前10時～
 婦人会例会 8月9日(水) 午前10時～



夏になれば、おちばではこどもおちばがえりが開催されていましたが、コロナ禍での感染拡大防止の観点から、4年間中止されて夏休みこどもおちばひのきしんが行われてきました。今年の夏、様々な制限の設定した上で、こどもおちばがえりが7月27日より8月6日まで開催されます。

事前予約制であったりプールや夜のパレードがなかったりしますが、おちばでの貴重な体験を得ることができる日々が始まります。

長年南河内支部の鼓笛隊のカメラマンを担当してきましたが、今年はそっと横から撮影できればなどと考えています。今年鼓笛隊は8月4～6日で帰参します。ちょっと寂しいですが、後進を育てるために一度離れようと思います。

でも、記録ということではなく、こどもたちのいい笑顔の写真は撮りたいと思います。

こどもおちばがえりの期間にぜひ、おちばにかえりましょう！

テーマソング 「ありがとう 夏のおちば」
<https://youtu.be/038CBNI7PEU>



「暑い時分には暑い」
 よう聞き分け。寒い時分には寒い、
 暑い時分には暑い。

今日の
 おやのことば



おさしづ 明治26年12月14日

昨日は猛暑日、今日も暑さが続いています。天気予報によれば、明日も暑さは続くようです。ただ歩いているだけで、額から汗が流れ落ちてきます。タオル地のハンカチが手放せない季節になってきました。

青く澄んだ空と白い雲。麦わら帽子とかき氷。夏が来る前に、時々思い起こしていたこの季節のイメージは、とても懐かしくて心地良いものでした。特に、寒さの厳しかった今年の冬には、夏の到来を心待ちにしていました。

「よう聞き分け。寒い時分には寒い、暑い時分には暑い」しかし、実際に夏を迎えると、肌に感じる暑さは想像以上に厳しい。アスファルトの道路で下を向くと、熱気が立ち上がってきます。かと言って、上を向いても日差しが強くて目を開けられません。やはり、前を向いて両手を振りながら、しっ

かり歩いていく姿勢が大切なのでしょう。ようやく、待っていた夏が来たのですから、夏らしい出来事の一つひとつを楽しみながら、毎日を過ごしたいものです。冷たいかき氷がこんなにおいしく感じられるのは、この暑さのおかげなのですから……。とはいえ、熱中症には気をつけましょう。早めに水分を補給し、休憩を取ることも必要です。暑い日に涼しく暮らす工夫をすることも、夏の楽しみの一つですね。(岡)

教祖伝逸話篇



63.目に見えん徳

教祖が、ある時、山中こいそに、「目に見える徳ほしいか、目に見えん徳ほしいか。どちらやな。」と、おおせになった。こいそは、「形のある物は、失うたり盗られたりしますので、目に見えん徳頂きとうございます。」と、お答え申し上げた。

【逸話篇の世界を旅する】63番「目に見えん徳」講師 正代分教会長 茶木谷吉信

130.小さな埃は

明治十六年頃のこと。教祖からご命を頂いて、当時二十代の高井直吉は、お屋敷から南三里ほどの所へ、お助けに出ささせていただいた。身上患いについてお諭しをしていると、先方は「わしはな、未だかつて悪いことをした覚えはないのや。」と剣もほろろに喰ってかかっていた。高井は、「私は未だそのことについて教祖に何も聞かせた頂いておりませんので、今すぐ帰って教祖にお伺いしてまいります。」と言って、三里の道を走って帰って教祖にお伺いをした。すると教祖は、「それはな、どんな新建の家でもな、しかも中に入るらんように隙間に目張りしてあってもな、十日も二十日も掃除せなんたら、畳の上に字が書けるほどの埃が積のやで。鏡にシミあるやろ。大きな埃やたら目につくよってに掃除するやろ。小さな埃は、目につかんよってに放っておくやろ。その小さな埃が沁み込んで、鏡にシミが出来るのやで。その話をしておやり。」と仰せ下された。高井は、「有り難うございました」とお礼申し上げ、すぐと三里の道のりを取って返して、先方の人に「ただ今こういう



ように聞かせていただきました。」とお取り次ぎした。すると先方は、「よくわかりました。悪いこと言ってすまん」と詫びを入れてそれから信心するようになり、身上の患いはすっきりと御守護いただいた。

130番「小さな埃は」講師 正代分教会長 茶木谷吉信

九州の豪雨被災地へ出動 - 災救隊 2023年7月21日 トピックス 災害救援ひのきしん隊災救隊山口教区隊熊本教区隊大分教区隊福岡教区隊 熊本・大分の2教区隊

九州地方では、6月30日から大雨が降り続き、広い範囲で床上・床下浸水などの被害に見舞われた。

熊本県では7月3日、「線状降水帯」が発生し、益城町などで床上・床下浸水などの被害が相次いだ。

こうしたなか、平成28年の熊本地震などでの救援活動を経て、現在もつながりのある災害救援ひのきしん隊(=災救隊、橋本武長本部長)本部と益城町社会福祉協議会(=社協)の連携から、災救隊熊本教区隊(川崎一保隊長)が同町社協と折衝。8日から10日まで出動することを決定した。

初日、熊本教区隊の隊員たちは、同町赤井地区の被災家屋で救援活動に当たった。現場となった家屋は、床上浸水によって多くの家財道具が汚泥まみれに。また、床下には10センチほどの水が溜まっていた。

隊員たちは、まず家財道具や“災害ごみ”を搬出。さらに9、10の両日にかけて、床板を外したうえで、床下に溜まった水をスポンジやタオルを使って手作業で排出した。

さらに、外した床板を再利用できるように、洗浄して乾かした。



熊本教区隊の隊員たちは、住民の要望を丹念に聞き取りながら、家財道具の搬出作業などに当たった(7月8日、熊本県益城町で)

この家屋に住む60代女性は「この家を建てる時に、たくさんの思い出があったので、被害に遭った当初はふさぎ込んでしまったが、ここまできれいにしてもらって希望が見えてきた。感謝しても、しきれない」と涙ぐんだ。

同教区隊は3日間の出動で延べ75人が出動した。

川崎隊長(59歳・人吉分教会長)は「社協の方々は、熊本地震や豪雨被害の際の救援活動を通じて、災救隊に厚い信頼と期待を寄せてくださっている。今後も要望があれば応えられるよう、準備を整えたい」と話した。

一方、大分県でも、大雨によって日田市や中津市などで被害が広がった。災救隊大分教区隊(佐治義信隊長)は16、17の両日、日田市の一般家屋へ出動。2日間で延べ28人が、家財道具の搬出や重機を使用しての泥出し作業に汗を流した。

◇

なお、福岡県では3日までに降り続いた大雨により、久留米市などで大規模な水害が発生。災救隊福岡教区隊(井真一郎隊長)は17日から、久留米市社協と連携しつつ、現地で救援活動に従事している。(天理時報8月2日号以降に詳報予定)

救援続報 - 山口教区隊

既報の通り、山口県内で初動の救援活動に従事した災救隊山口教区隊(山瀬文男隊長)は、その後も宇部市社協の要請を受け、14日に宇部市内の被災家屋へ出動。裏庭の法面が崩れて家屋の敷地内に流入した土砂を、手作業で撤去した。

また、15、16の両日は、下関市社協の要請を受け、同市豊田町の被災家屋へ出動し、“災害ごみ”や汚泥の搬出作業などに従事。3日間で延べ35人の隊員が救援活動に当たった。



※ 誰にでもできる支援活動 古タオルを洗濯して送ろう ※活動の様子はこちらから↓

草野 紀視子 7月2日 7:27

おはようございます。被災地に向けて走ります。

今回で古タオルがなくなったため、備蓄しておいてすぐ動けるよう、ご協力をお願いできないでしょうか。

〒854-0054 長崎県諫早市小ヶ倉町51

一般社団法人長崎国際・長崎国際ゴルフ倶楽部 気付

NPO 法人有明支縁会理事長 草野紀視子 宛

大変申し訳ございませんが、お送りいただくかお持ちいただけたら幸いです。

よろしく願いいたします。

.....

前述したとおり九州や山口、秋田でも水害が発生しています。

水害が発生し、その被災した家屋を掃除するときに必要なものが、雑巾なのですが、新品の雑巾は水を吸いませぬ、ですから災害直後の時には使えないのです。そこで、今家庭で使っているタオルで痛んできたものが良いのです、それを実際に活動されている方や団体に送ることで、ささやかではありますが、その方たちの活動を支援することになります。なお、送るときに注意することは、同じ種類ごとにまとめて段ボールに入れて送る。その時、箱には中に何が入っているのかがわかるように明記する。

また、使い古しのタオルですが、必ず洗って枚数を数えて送りましょう。受け取った方が再整理する手間をできるだけ省けるように考えて送りましょう。よろしく願いいたします。



天理教國延分教会さんの記事より

回覧板に「盆踊り」の案内が入っていました。

近辺の村々では四年ぶりの開催で、会場設営や運営の方法を知る人が少なくなり、準備が大変なようです。

お盆（盂蘭盆会）というのは仏教の習いで、縁者が集まって、前年亡くなった方や先祖のたましいを家にお呼びし、御礼やねぎらいの言葉を伝え、踊りで慰めようとするのですね。

わたしは、教会のみたままつり（慰霊祭）は三月と九月に決まっていると思っていましたが、八月に会長さんに来てもらい、祭文をあげてもらう家庭も多いようです。

* *

このたびのはらみているをうちなるわ
なんとをもふてまちているやら
こればかり人なみやとハをもうなよ
なんでも月日ゑらいをもわく
このもとハ六ねんいぜんに三月の
十五日よりむかいとりたで
それからはいまゝて月日しいかりと
だきしめていたはやくみせたい
それしらすうちなるものハなにもかも
せかいなみなるよふにをもふて

おふできき第七号に登場する 65 番からのお歌です。

このお歌から、人間にはたましいがあり、死んだときにはそのたましいは親神様の御懐にしっかりと抱かれており、匂が来て、新しい衣（身体）を借りて生まれかわってくるのだと信じることができると思います。

誰かのお世話になりっぱなしで死んでいったとしたら、今度生まれかわってきた時は、その借りを返さねばならないたましいを持った人達の中に生まれてくる、とは先人の言葉です。

親が子となり、子が親となって生まれてきて、前生の借りを返し合う。

また上司と部下や隣人のように、好きでも嫌でも、一生付き合わなければならなくなるひとたち。

それは私たちには見えない、自分の前生の行いや人間関係を、親神様が見せてくださっている姿なのではありませんか。

人を喜ばせて尽くしただけ、尽くされる運命に、借りがあれば返さなければならない運命に。

* *

今年のお盆は、久しぶりに大勢集まって、亡くなった方の前で、生前賜った恩の話をいっばいいたしましょう。（以上引用）

* *

そうして、語り伝えることがお盆と正月の大事な機会だったのですね。

この夏は、コロナ禍で会えなかった人たちと、あって四方山話をしましょう。会長拝

